

交換過程からみた女子体育大生のスポーツ支援ニーズ に関する研究

A study on support suppliers of sports athletes demands from a viewpoint of an exchange process

小野里 真 弓¹⁾ 高橋 和 之²⁾ 大門 芳 行²⁾ 柴田 雅 貴³⁾
湯澤 芳 貴³⁾ 畑 攻²⁾ 成瀬 美 紀⁴⁾

Mayumi ONOZATO, Kazuyuki TAKAHASHI, Yoshiyuki DAIMON, Masaki SHIBATA
Yoshiki YUZAWA, Osamu HATA and Miki NARUSE

Abstract

In the environment surrounding athletes, various conditions are assumed by a competition group and a competition level. For example, a player of an international level adds supervision and coach, who takes a high trainer and doctor of specialty. And such as an athlete can live a life by the cause of support of perfect sport science.

However, it is not cleared whether you become the support that player oneself demands. It is cleared the player's needs and demands, and it is important that the support that fitted the needs and demands is offered for competition power improvement.

The purpose of this study was to inspecting the support that player's demands for women's college students of physical education, and it makes attention to an exchange process of sport marketing. The questionnaire made from items such as sports characteristic, support needs and performed questionnaire survey. For provided data, adequate statistical procedure such as factor analysis, regression analysis, T-test, F-test were applied. The following results were obtained:

1. The support needs and demands of women's college students of physical education were clarified.
2. Support needs were structured, and a support factor of the player who accepted sports activities was clarified.
3. A function of a support needs factor was shown definitely.

keywords : exchange process, sports athletes, support suppliers

I. 研究の背景・目的

スポーツは、「人間の生活の中に生まれた文化であり、一般に、最も狭義には競技として行われる運動現象をいい、最も広義には、それを含めて、楽しみや健康を求めて自発的に行われる運動現象のすべてをいう。」(高島2001)²⁰⁾と言われるように、様々な競技レベルやスポーツ活動の意味を含んでいる。最も広義となるスポーツは、いわゆる生涯スポーツと同義であり、人間と運動のかかわりとしての子どもの運動遊びから、楽しみや生活の充実、また健康維持・増進のための運動活動と捉えることができる。

一方、狭義となる競技スポーツでは、その頂点はオリンピックや世界大会などの国際レベルでの活躍を期待されるが、一般的には、より高いパフォーマンスや記録向上を目指すスポーツ活動を指すものである。

スポーツマネジメントの課題は、これらの概念を総括したあらゆるスポーツの場面において、人びとの運動需要に対応し、それぞれの運動現象の目的を達成するために必要な条件整備をすることであり、よりよいスポーツ活動の場を提供することである。即ち、スポーツ活動を提供する様々な組織体や指導者には、対象となる多様な競技者や運動者が必要とする条件を適確に把握し、より効果的・効率的にスポーツ活動を実践できるような環境づくりやサポートが求められている。

このような課題は、伝統的なスポーツ事業論の基本対象となるが、今日的なスポーツマネジメントの分野での主要領域であるマーケティング活動の一環として

1) 日本女子体育大学 (助手)
2) 日本女子体育大学 (教授)
3) 日本女子体育大学 (講師)
4) 日本女子体育大学大学院生

取り上げることができる。一般的にスポーツマーケティングとは、「交換過程を通して、スポーツ消費者のニーズ（欲求・必要性）とウォンツ（対象物）を充足させるために意図された一連の諸活動の総体である」（Mullin et al., 1993）⁹⁾と定義づけられ、スポーツ組織とスポーツ消費者の双方の満足を高める相互関係を創りあげていくものである。また、ここでの「交換（exchange）」は、「物や財としてのスポーツ製品」だけではなく、今日においては「サービス財としてのスポーツ製品（あるいは活動）」を包含するものであり、指導や情報及び支援などのスポーツ活動の場面で発生する様々なサービスや本質的な価値を提供者と受け手の間で交換することである。

スポーツ活動に関するこれまでのスポーツマーケティングの研究では、フィットネスクラブやテニスレッスン、ゴルフレッスンなどのレッスンビジネスにおける利用評価や公共スポーツ施設における双方の価値交換を前提とした、利用者サイドからみたニーズの検討など、生涯スポーツを対象とした研究は多く報告されている（例えば、「テニスレッスンにおけるサービス・マネジメントに関する研究」（小野里・畑；2001）¹⁴⁾、「フィットネスサービスのプロダクト構造と機能」（佐藤；2002）¹⁷⁾など）。一方、競技者を含めて運動に深く関わる者へのサポートのあり方やニーズについてはあまり注目されていないのが現状である。現状においては、提供者サイドの合理観に基づく、最新の情報やトレーニング技術などの医・科学的なサポートの提供に比重がかかっているように受けとめることもできる。そのような医・科学的なサポートが有効であることは言うまでもないが、競技力に直接結びつくと思われる合理的な要因のみを追求し、そのサポートを強化していくという発想ではなく、選手を一人の人間として捉え、広く生活などの様々な状況を含めた競技力の向上を目指した支援やサポートを実現していくことが必要であるものと考えられる。

本研究は、このような状況を踏まえ、競技をはじめとする、運動に深く関わる者のサポート要因を探索的に抽出するものであり、女子体育大の運動科学科に所属する学生を対象により具体的な検討を試みるものである。言い換えれば、今後の競技者等を対象とする本格的な研究の基礎的な段階として位置づけることができるものである。体育大学の中でも本学の運動科学科は、競技活動や舞踊活動を積極的に行う学生が中心であり、スポーツの専門性を高めることを目的とすると

ころに特徴がある。また、運動科学科の学生は、大学進学以前の高校時代において競技力向上を目指した運動部に所属していた学生が殆どであり、競技水準は様々ではあるものの、競技者生活を深く経験しているという特質がある。

また、本研究は、競技者とサポート提供者の間での「交換」を想定しているが、その最も基本となる交換過程は指導者と競技者の間での相互作用があげられる。例えば、提供者である指導者は選手に対して、競技力の向上や高いパフォーマンスの発揮を可能にするためのより効果的な指導やサポートを提供し、受け手である競技者は、指導の成果や競技成績などの結果を残すことによって指導者に達成感をもたらすということをはじめ、指導者への感謝や尊敬の念を含めて交換が成立すると考える。

しかしながら、本研究では、ここであげた例のサポート等のように提供者と受け手の対象者が明確に位置づけられるような実証型の交換過程を取り上げる研究の段階ではなく、対象者は競技者、即ち運動科学科の学生競技者と位置づけられるものの、現段階ではサポート主体の特定は困難であり、あくまでも対象者である選手が競技生活を過ごす中で求める支援やサポートの追及を中心とする。さらに、対象者が生み出し、提供者に交換可能な事象を考察し、運動に深く関わる学生の日線から支援ニーズを明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 基本的アプローチ

現在、わが国におけるオリンピック選手や日本代表クラスのトップアスリートは、国立スポーツ科学センター（JISS：Japan Institute of Sports Sciences）を中心に各競技団体や組織による医・科学・情報の3本を柱としたサポート体制が展開されている。このようなサポートシステムは国を代表する選手の競技力向上に大きく貢献していることは様々な報告されている通りである（浅見（2000）²⁾、川原（2000）⁸⁾）。しかし、一般的には、競技者を取り巻く支援やサポートは、競技レベルや専門性に関わらず、あらゆる場面で必要不可欠なものでもある。

また、各種の競技団体や強化組織が競技力向上を目指して様々なサポートを実施しているものの、競技者である選手自身が求めているサポートとなっているか

は明確にされていないと思われる。組織的なサポートシステムの構築は必要ではあるが、提供者サイドからの一方的なサポートの展開だけではなく、サポートを受ける側、言い換えれば選手の側からのニーズやウォンツを明確にし、そのニーズに適応したサポートを検討していくことは今後の競技力向上に重要な意味を持つものと言える。

このような状況を踏まえ、本研究では、女子体育大学の運動科学科に所属する学生を対象に、マーケティングにおける交換過程の視点から競技者が求めるニーズや支援サポートを基礎的に究明する。

図1は、競技の視点からみた運動者の階層において、本研究の対象者の位置づけを示したものである。ここでの運動科学科とは、ナショナルレベルのトップアスリートや競技性の高いアスリートにはおよばないものの競技力向上を目指すアスリート、またはより高いパ

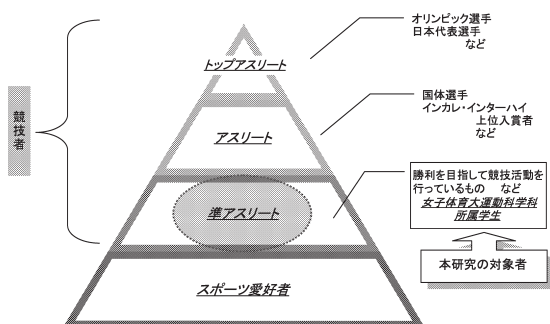


図1 競技の視点からみた運動者の階層

フォーマンスを求める舞踊家を中心に、運動・スポーツの専門性を身につけることを目的とし、殆どの学生が入学以前から競技者または舞踊活動に取り組む準アスリートである。本研究では、競技水準は様々であるが、現在、学内の運動部に所属し、競技生活を行っている学生に着目し、選手の目線から求められる支援内容やサポートを基礎的に検証するとともに、運動科学のサポートを検討することを目的とする。

また、表1は、本研究での競技者を取り巻く環境を分類し整理したものである。一般的に競技力向上の基本要素となるのは、「体力」、「技術」、「戦術」、「メンタル（知的精神的能力）」があげられる。しかしながら、競技活動においては、指導者の存在や競技仲間、整備された施設などの環境条件が必要である。そのような条件は競技生活に直接的に影響することから「環境1」として想定した。さらに、競技者である一方で女子体育大生としての生活環境も多大な影響があることから、大学の授業や友人、家族などの要因を「環境2」として想定した。これらの要因を本研究における競技者を取り巻く環境要素とし、各要素と女子体育大生で競技活動を実践している学生の意識との関係をマーケティングにおける交換過程を手がかりに分析と考察を試みた。

しかしながら、本研究では、これらの課題への探索的な取り掛かりとして女子体育大運動科学科において学内の運動部に所属する学生を対象としていることから、競技力や競技経験の統一化や競技レベルに関する

表1 競技者を取り巻く環境要素

競技者	←	■	競技力向上の基本要素	体力 技術 戦術 メンタル (知的精神的能力)	
	←	■	環境1 (競技生活)	指導者 競技仲間 ライバル 専門団体 情報(知識) 自主活動 コンディショニング	講習会・セミナー 試合 トレーニング 施設 人生・進路 サポーター
	←	■	環境2 (学生生活)	友人 趣味 大学 アルバイト	授業 家族

ばらつきがあり、研究範囲の限界があることは否めない。そのような研究の限界を踏まえ、運動に深く関わる者とその環境における必要な支援やサポートの交換過程から、女子体育大生が求める競技活動の在り方を基礎的に分析・考察する。

2. 調査方法と分析の手順

(1) 調査項目の設定

調査項目は、関連の先行研究から高校時代、現在における競技状況（現在と高校時代の運動部所属状況および種目）となる「スポーツ特性1」、選手レベル（正選手、補欠選手、一般選手）や競技レベル（国際大会出場、全国大会出場等）、最高実績（インターハイ優勝、インカレ入賞等）からなる「スポーツ特性2」を設定した。さらに、競技者を取り巻く環境を先に述べた表1の要素から支援ニーズに関する48項目を設定し、競技生活への必要性として「非常に思う」から「全く思わない」の5段階の評定尺度で回答を求めた。また、競技生活と学生生活に関する満足度（2項目）を設定した。

(2) 調査対象および実施期間

調査は、女子体育大学運動科学科のスポーツ科学専攻および舞踊学専攻の2学年に在籍している学生を対象にアンケート調査を実施し、スポーツ科学専攻213名、舞踊学専攻86名の回答を得た。調査期間は、2006年7月であった。

(3) 分析の手順

得られたデータに対し、統計ソフトSPSS13.0ver.を用いてスポーツ科学専攻、舞踊学専攻の基本統計を求めた。次に、スポーツ科学専攻で運動部に所属している学生のサンプルにおいて、支援ニーズに関する48項目に対して因子分析を行った。因子分析は、最も標準的な主因子法を選択した。抽出された各因子の単純構造を得るために、固有値1.0以上を基準にして因子数を決定し、Nomal-Varimax法による直行回転を施し、因子負荷量0.50以上の項目を取り上げて因子として解釈した。

抽出された因子構造に基づき、各因子をスコア化し、選手レベルおよび競技生活の満足度により比較・検討した。

さらに、競技者を取り巻く環境としての支援ニーズが有効に機能しているか、また交換過程が効率的にされているかを検討するために「競技生活満足度」を従属変数とし、支援ニーズの各因子を説明変数として重

回帰分析を行った。

これらの分析とともに必要に応じて、T検定、F検定（一要因分散分析）を用い結果の有意性を検討した。

III. 結果と考察

1. 調査・分析対象者の基本特性

(1) スポーツ活動状況

本研究では、競技者を取り巻く環境や求められるサポートシステムを基礎的に検討するにあたり、大半が専門性の高い競技レベルで競技者を経験している女子体育大学運動科学科の学生に焦点をあて実態調査を行った。

表2は、調査対象者の基本特性を示している。スポーツ科学専攻に所属している学生は、76.06%が運動部に所属し、2年生でありながら正選手で活躍している学生が26.29%を占めている。競技レベルにおいては、約40%が全国大会出場や地区（各地方）大会出場と競技水準の高い試合を経験している。舞踊学専攻に所属している学生は、ダンス活動をしている学生が75.58%と圧倒的に多く、運動部への所属は13.95%となっている。競技レベルにおいては、大会への出場というよりも様々な機会に舞踊活動を行っていることが伺えた。また、指導者の影響では、スポーツ科学専攻の学生は「強く受ける」、「まあ受ける」、「受ける」と回答した学生が約7割以上を占める一方で舞踊学専攻の学生は約7割が「無回答」という結果を示し、指導者の影響はあまり関係がないことが明らかにされた。

これらの結果は、スポーツ科学専攻および舞踊学専攻に所属する学生のスポーツ活動状況の特徴であると言える。

(2) 生活満足度

生活満足度においては、「競技生活の満足度」と「学生生活の満足度」の2項目を設定した。表2に示すように、スポーツ科学専攻に所属している学生はどちらの満足度も、「満足」、「どちらともいえない」の回答が中心となっており、舞踊学専攻の学生は「無回答」が圧倒的に多い割合を占めた。また、舞踊学専攻の学生は、どちらの満足度も「満足」と回答している学生が20%未満とスポーツ科学専攻に比べて低い結果を示した。

これらの結果から、競技生活や学生生活において満足している学生はスポーツ科学専攻で約3割、舞踊学は約2割とあまり多くはないことが示された。

表2 調査対象者の基本特性

	スポーツ科学 n=213		舞踊学 n=86	
	f	%	f	%
活動状況				
運動部所属	162	76.06	12	13.95
ダンス活動	2	0.94	65	75.58
活動なし	39	18.31	8	9.30
無回答	10	4.69	1	1.16
選手レベル				
正選手	56	26.29	6	6.98
補欠選手	19	8.92	0	0
一般選手	73	34.27	5	5.81
無回答	65	30.52	75	87.21
競技レベル				
国際大会出場	4	1.88	0	0
全国大会出場	52	24.41	7	8.14
地区（各地方）大会出場	28	13.15	1	1.16
県大会出場	8	3.76	0	0.00
地区（地域）大会出場	24	11.27	1	1.16
出場経験なし	15	7.04	0	0
無回答	82	38.50	77	89.53
指導者の影響				
強く受ける	54	25.35	12	13.95
まあ受ける	67	31.46	8	9.30
受ける	33	15.49	4	4.65
あまり受けない	15	7.04	1	1.16
全く受けない	6	2.82	0	0
無回答	38	17.84	61	70.93
競技生活満足度				
非常に満足	13	6.10	4	4.65
満足	44	20.66	14	16.28
どちらともいえない	67	31.46	8	9.30
あまり満足していない	30	14.08	6	6.98
満足していない	18	8.45	2	2.33
無回答	41	19.25	52	60.47
生活満足度				
非常に満足	12	5.63	2	2.33
満足	60	28.17	15	17.44
どちらともいえない	68	31.92	11	12.79
あまり満足していない	18	8.45	4	4.65
満足していない	18	8.45	2	2.33
無回答	37	17.37	52	60.47

(3) 分析対象者の特定

調査対象者のスポーツ活動状況および生活満足度の結果を踏まえ、本研究のテーマである競技をはじめスポーツや運動に深くかかわる者の目線から支援ニーズを検討するために、スポーツ科学専攻において運動部

表3 分析対象者の競技特性

スポーツ科学専攻・現在運動部に所属		N=162	
		n	%
選手レベル	正選手	55	33.95
	補欠選手	19	11.73
	一般選手	70	43.21
	無回答	18	11.11
競技レベル	国際大会出場	4	2.47
	全国大会出場	50	30.86
	地区（各地方）大会出場	28	17.28
	県大会出場	8	4.94
	地区（地域）大会出場	24	14.81
	出場経験なし	13	8.02
	無回答	35	21.60

に所属している学生162名に着目した。

表3は、分析対象者の選手レベルおよび競技レベルを示したものである。選手レベルでは、一般選手が43.21%と最も高い割合を占め、次いで正選手が33.95%であった。競技レベルでは、全国大会出場が30.86%と最も多く、次いで各地方大会、地域大会への出場経験が多い結果を示した。

これらの結果から、部内での選手レベルおよび競技レベルが示され、対象者の競技活動状況が明らかにされた。本研究では、より高いパフォーマンスや競技力向上を目指して活動する競技者を対象としていることから、以下の分析、考察においてはスポーツ科学専攻の運動部所属学生を分析対象として特定した。

2. 競技力向上に関する支援ニーズの基礎的反応

競技者を取り巻く環境は、様々な状況が想定されるが本研究では、競技力向上に欠くことのできない、「体力」、「技術」、「戦術」、知的精神的能力を意味する「メンタル」を中心に、トレーニングやコンディショニング、競技仲間などの競技生活で想定される項目および友人の存在や大学の授業やアルバイトなどの学生生活から想定される項目をあわせ、48項目を設定した。表4は、設定した48項目に対して競技力向上への必要性を「非常に思う」から「全く思わない」の5段階の評定尺度で回答を求めた結果を示したものである。高い反応を示した項目は、「28. 趣味などによる気分転換」、「23. 家族の支え」、「25. チーム内の助け合い」、「8. 監督・コーチによる技術指導」、「17. 何でも相談できる友人」であった。一方、低い結果を示した項目は、

表4 支援ニーズの基礎的反応

	スポーツ科学 現在運動部に所属 n=162	
	M	SD
1. 監督・コーチとの打ち解けた話	4.12	0.77
2. 専門機関による心理テスト	3.09	0.98
3. 十分な用具	4.28	0.76
4. 監督・コーチからのやる気の出る方法の指導	4.28	0.90
5. 専門機関によるカウンセリング	3.22	1.01
6. くつろげる場所	4.13	0.95
7. 整った施設, 設備	4.20	0.86
8. 監督・コーチによる技術指導	4.49	0.72
9. 体調維持や体力向上のためにつながる大学の授業	3.85	0.92
10. 指導者以外の先生とのコミュニケーション	3.64	0.88
11. 監督・コーチからの効果的な練習方法の提示	4.16	0.88
12. 専門誌などによる自主的な情報収集	3.85	0.91
13. 奨学金制度	3.43	1.12
14. 学内や学外で行われる各種の合宿	3.77	0.86
15. 監督・コーチによる体力トレーニングの指導	3.96	0.85
16. 専門機関によるボディケア	3.95	1.00
17. 何でも相談できる友人	4.47	0.82
18. 目標やレベルに応じた公式試合	4.36	0.79
19. 監督・コーチによる食生活のアドバイス	3.62	0.99
20. 生活資金のためのアルバイト	3.35	1.04
21. 技術向上につながる大学の授業	3.73	0.96
22. 監督・コーチによる最新情報の提供	3.73	0.89
23. 家族の支え	4.59	0.79
24. 専門機関によるメンタルトレーニング	3.79	0.96
25. チーム内の助け合い	4.50	0.77
26. 自主的なイメージトレーニング	4.26	0.85
27. ライバル	4.29	0.85
28. 趣味などによる気分転換	4.61	0.69
29. 図書館の利用	3.33	1.04
30. 専門研究機関による動作分析や映像解析	3.73	0.98
31. ためになる大学の講義	3.48	0.93
32. メンタルの維持向上につながる授業	3.62	0.93
33. インターネット等の情報収集	3.64	0.94
34. 自主的なカウンセリング	3.30	0.98
35. 様々なボランティア活動	2.99	1.02
36. 整備された学食	3.79	1.02
37. ウェア, シューズなどの備品やサプリメント等の提供	3.83	1.03
38. 自主的な技術練習	4.42	0.79
39. 専門家や専門機関による医・科学の情報	3.70	0.89
40. 学外における習い事やレッスン	3.02	0.98
41. 個人的な試合や記録会への参加	3.53	1.06
42. 専門研究機関による各種の測定	3.42	0.92
43. 学内施設の利用	3.93	0.88
44. 自主的なコンディショニング	4.04	0.83
45. スポーツドクターによる診察	3.87	0.99
46. 体力向上に向けた自主的なトレーニング	4.20	0.83
47. 専門家や専門機関によるトレーニング指導	3.85	0.96
48. 友達との娯楽	4.46	0.79

※高得点の項目および値を強調・下線で表示

「2. 専門機関による心理テスト」, 「5. 専門機関によるカウンセリング」, 「35. 様々なボランティア活動」などであった。

この結果, スポーツ活動環境に直接関わる施設・設備, 技術指導や練習の必要性が高い傾向を示すことは当然の結果であるが, そのような競技に直結する項目だけではなく, 何でも相談できる友人や家族の存在, 趣味などの気分転換などの競技以外の項目に関しても必要性が高いことが明らかにされた。また, 専門機関でのカウンセリングや各種の測定などの項目は低い結果を示したが, これらは単純に必要性を感じていないのか, 実際に経験したことがないなどの要因があるのか本研究の結果のみでは断定できないが, 競技力向上への必要性としてはそれほど意識されていないことが示された。

これらの結果から, 女子体育大生からみた必要とされる競技環境や求められる支援が明らかにされた。

3. 支援ニーズの因子構造

競技力向上に関する支援ニーズとして設定した48項目に対して内容の縮約・統合, および項目の妥当性を検討するために, スポーツ科学専攻で運動部に所属する学生のデータに対して因子分析を行った。表5は分析の結果得られた因子構造を示したものである。

第1因子に抽出された項目は, 「46. 体力向上に向けた自主的トレーニング」, 「47. 専門家や専門機関によるトレーニング指導」, 「44. 自主的なコンディショニング」などの項目から「F1: 自主自立」と命名した。第2因子は, 「29. 図書館の利用」, 「31. ためになる大学の講義」が抽出され「F2: 視野の拡大」と解釈した。第3因子は「5. 専門機関によるカウンセリング」, 「2. 専門機関による心理テスト」などの項目から「F3: 専門的なメンタルサポート」, 第4因子は, 「17. なんでも相談できる友人」, 「48. 友達との娯楽」などの項目から「F4: 気晴らし(リラクゼーション)」と解釈した。以下, 表2に示すように, 「F5: 日常的なケア」, 「F6: 指導者との関わり」, 「F7: 学生生活の諸資源」, 「F8: 学外での活動」, 「F9: 施設・設備」, 「F10: 自己動機づけ」の10因子が抽出された。また, 「6. くつろげる場所」, 「17. 監督・コーチからの効果的な練習方法の提示」などの16項目は除外された。

ここでの因子分析で抽出された10因子は, 本研究のテーマである競技力向上の支援ニーズとして設定した項目の内容が意味ある因子として統合され, 内容的に

妥当な因子であるものと考えられる。

4. スポーツ活動状況による

支援ニーズ因子スコアの反応

運動やスポーツに深く関わる学生のスポーツ活動状況に応じて, 求められる競技環境や支援を検討するために, 部内での選手レベルおよび競技生活の満足度により支援ニーズとして抽出された10因子のスコア比較を行った。

(1) 部内での選手レベルによる因子スコア比較

学内運動部に所属している学生の部内での選手レベルによる因子スコアの比較を行った(図2表6)。その結果, 統計的に有意な差は認められてはいないが, 正選手や一般選手によって異なる反応が示された。特に, 「F6: 指導者との関わり」では, 補欠選手の反応が高く, 正選手や一般選手よりも指導者との関わりを必要としていることが伺える。また, 「F4: 専門的なメンタルサポート」では正選手や一般選手に比べ, 補欠選手の反応が低い傾向が示された。

これらの結果から, 各選手レベルで有意性はみられないものの, 部内での状況によって必要とする支援の傾向性がみられた。

(2) 競技生活満足度別による因子スコア比較

運動部で活動をしている学生の競技生活満足による因子スコアの比較を行った(図3表7)。ここでは, 競技生活に「非常に満足」から「満足していない」の5段階で回答を求め, 各段階による比較を行った結果, 「F6: 指導者との関わり」において「非常に満足」の学生が圧倒的に高い反応を示し, 「満足していない」学生は低い反応を示した。また, 「F5: 日常的なケア」においても「非常に満足」の学生は高い反応を示した。すなわち, 指導者との打ち解けた話や技術指導など, 選手である学生とのコミュニケーションが必要であることが明らかに示された。また, 「F1: 自主自立」, 「F9: 施設・設備」においては「非常に満足」の学生は低い反応を示したことから, 自主的なトレーニングやコンディショニング, 施設・設備は現状で十分であると考えていることが伺える。

一方, 競技生活に「満足していない」学生は, 全体的に低い反応を示し, 支援やサポートを必要と感じられていないことが示された。この結果は, 単に支援やサポートを必要としていないのか, あるいは競技活動そのものに不満があるのか, ここでは判明しがたいものであるが, 各サポート要素の見直しや競技生活を過

表5 「支援ニーズ」の因子構造

変数	アイテム	寄与率	負荷量
第1因子 <F1>	自主自立	30.62%	
46	体力向上に向けた自主的トレーニング		0.758
45	スポーツドクターによる診察		0.701
47	専門家や専門機関によるトレーニング指導		0.690
43	学内施設の活用		0.677
44	自主的なコンディショニング		0.669
39	専門家や専門機関による医・科学の情報		0.563
38	自主的な技術練習		0.551
第2因子 <F2>	視野の拡大	5.23%	
29	図書館の利用		0.727
31	ためになる大学の講義		0.604
35	様々なボランティア活動		0.553
第3因子 <F3>	専門的なメンタルサポート	5.17%	
5	専門機関によるカウンセリング		0.663
2	専門機関による心理テスト		0.637
24	専門機関によるメンタルトレーニング		0.619
第4因子 <F4>	気晴らし(リラクゼーション)	4.50%	
17	なんでも相談できる友人		0.721
48	友達との娯楽		0.661
25	チーム内の助け合い		0.598
28	趣味などによる気分転換		0.520
第5因子 <F5>	日常的なケア	3.97%	
10	指導者以外の先生とのコミュニケーション		0.649
19	監督・コーチによる食生活のアドバイス		0.576
第6因子 <F6>	指導者との関わり	3.48%	
4	監督・コーチからやる気の出る方法の指導		0.722
1	監督・コーチとの打ち解けた話		0.623
8	監督・コーチによる技術指導		0.609
第7因子 <F7>	学生生活の諸資源	3.15%	
20	生活資金のためのアルバイト		0.637
21	技術向上につながる大学の授業		0.619
9	体調維持や体力向上につながる大学の授業		0.598
第8因子 <F8>	学外での活動	3.13%	
40	学外における習い事やレッスン		0.731
41	個人的な試合や記録会への参加		0.637
34	自主的なカウンセリング		0.612
第9因子 <F9>	施設・設備	2.67%	
7	整った施設, 設備		0.746
3	十分な用具		0.621
第10因子 <F10>	自己動機づけ	2.54%	
27	ライバル		0.727
26	自主的なイメージトレーニング		0.604

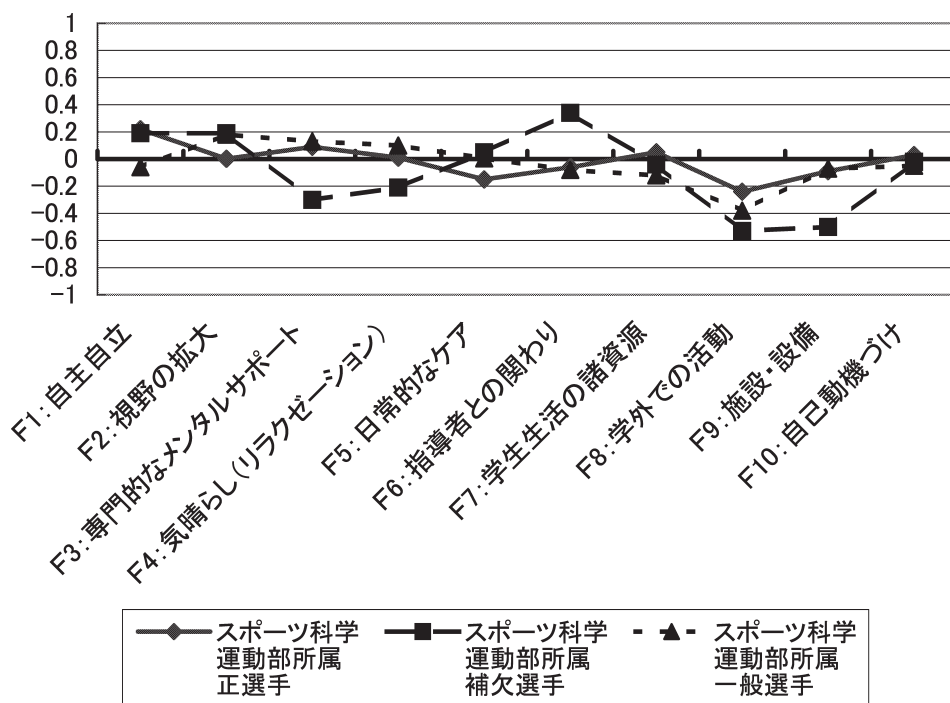


図2・表6 選手レベル別支援ニーズ因子スコア比較

	スポーツ科学 運動部所属 正選手 n=55		スポーツ科学 運動部所属 補欠選手 n=19		スポーツ科学 運動部所属 一般選手 n=70		F 検定
	M	SD	M	SD	M	SD	
F1：自主自立	0.22	0.99	0.19	1.07	-0.06	0.91	n.s.
F2：視野の拡大	0.002	1.05	0.19	1.09	0.18	0.84	n.s.
F3：専門的なメンタルサポート	0.09	1.00	-0.30	1.21	0.13	0.9	n.s.
F4：気晴らし（リラクゼーション）	0.01	0.92	-0.21	1.16	0.10	0.98	n.s.
F5：日常的なケア	-0.15	0.98	0.05	1.25	0.005	0.99	n.s.
F6：指導者との関わり	-0.06	0.98	0.34	1.26	-0.08	1.03	n.s.
F7：学生生活の諸資源	0.05	0.97	-0.04	0.74	-0.12	0.97	n.s.
F8：学外での活動	-0.24	0.95	-0.53	0.73	-0.38	0.95	n.s.
F9：施設・設備	-0.09	0.99	-0.5	1.78	-0.07	0.88	n.s.
F10：自己動機づけ	0.03	0.99	-0.02	0.79	-0.05	1.08	n.s.

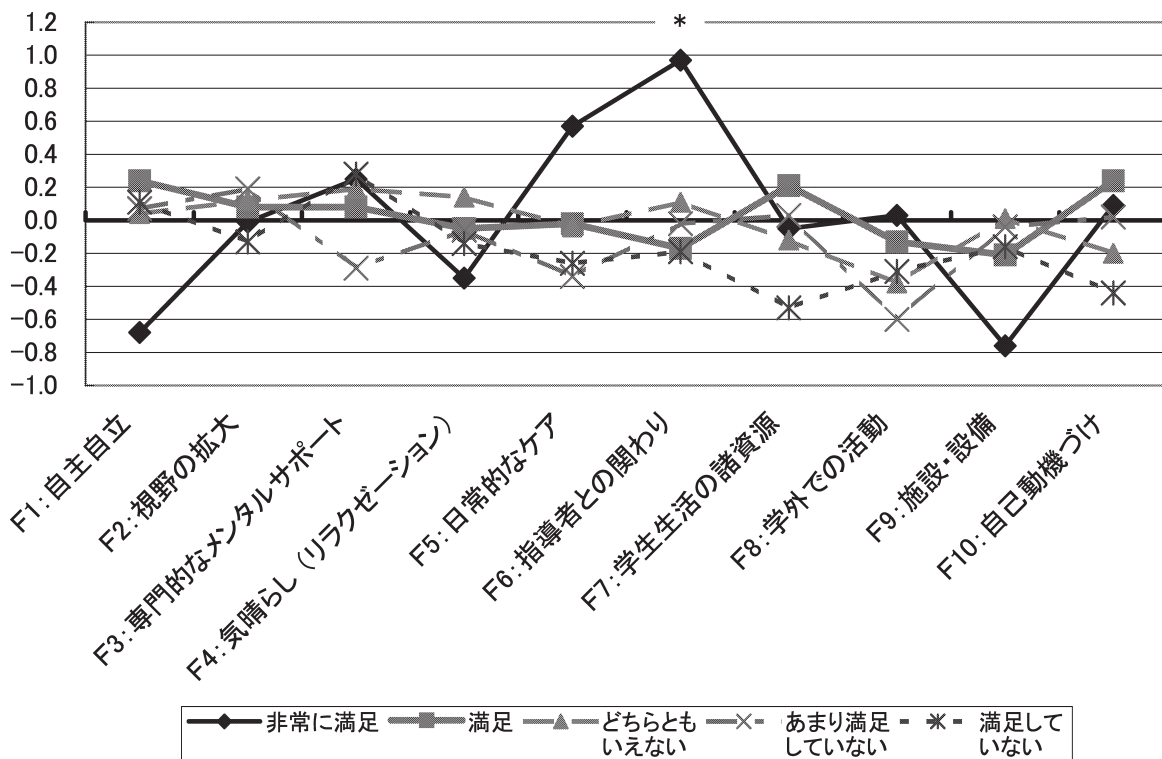


図3・表7 競技生活満足度別支援ニーズ因子スコア比較

	非常に満足		満足		どちらとも いえない		あまり満足 していない		満足して いない		F 検定
	n=12		n=42		n=61		n=28		n=15		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
F1：自主自立	-0.68	1.00	0.24	0.87	0.04	0.93	0.07	1.20	0.11	1.17	n.s.
F2：視野の拡大	-0.01	1.17	0.08	0.97	0.12	0.71	0.19	1.16	-0.13	1.13	n.s.
F3：専門的なメンタルサポート	0.25	1.46	0.08	1.03	0.19	0.89	-0.29	0.74	0.28	1.15	n.s.
F4：気晴らし (リラクゼーション)	-0.35	0.94	-0.05	0.87	0.14	0.93	-0.06	1.12	-0.14	1.40	n.s.
F5：日常的なケア	0.57	1.12	-0.02	0.89	-0.04	0.90	-0.34	1.32	-0.26	0.84	n.s.
F6：指導者との関わり	0.97	1.08	-0.17	0.95	0.11	0.87	-0.02	1.12	-0.19	1.40	*
F7：学生生活の諸資源	-0.05	1.02	0.21	0.98	-0.12	0.81	0.03	1.20	-0.53	0.75	n.s.
F8：学外での活動	0.03	0.56	-0.13	0.89	-0.38	0.86	-0.60	1.10	-0.31	1.00	n.s.
F9：施設・設備	-0.76	2.10	-0.21	1.06	0.01	0.75	-0.04	0.93	-0.16	0.91	n.s.
F10：自己動機づけ	0.09	0.57	0.24	0.92	-0.20	0.80	0.02	1.04	-0.44	1.76	n.s.

* P<0.05

ごす中での様々なケアが必要ではないかと考える。

これらの結果は、女子体育大生のスポーツ活動状況によって競技を行う環境として必要と考えるものや求める支援を明らかに示すものと言える。

5. 女子体育大生の競技生活満足度と

支援ニーズの機能

女子体育大生が競技力向上またはパフォーマンスを高めるために必要と考える条件が有効に機能しているかを検証するにあたり、「競技生活の満足」との関係から考察した。

分析は、「競技生活の満足」を従属変数、支援ニーズの各因子を説明変数とし、従属変数である満足度に対する説明変数の規定力を重回帰分析により明らかにした。

(1) 運動部所属学生における支援ニーズ因子の機能

ここでの解釈は、従属変数である「競技生活満足度」に対して標準偏回帰係数がプラス（右側）に作用するほど満足度を高める有効な機能となるものであり、マイナス（左側）に作用するほど、必要と思えば思うほど有効に機能していないことを示すと考える。すなわち、有意に作用している場合は競技者と監督・コーチの指導や支援の交換が有効に機能していることを意味し、有意性が認められていない場合はそこでの交換が明確に機能していないことを意味するものである。

表8は、競技生活満足度と支援ニーズ因子の規定関係を示したものである。この結果、「F6：指導者との関

わり」、「F7：学生生活での諸資源」、「F5：日常的なケア」の要因が競技生活の満足にプラスに作用することが示された。すなわち、運動部に所属している学生は指導者との関わりをはじめ、大学での専門的な授業や日常的なケアなどの全人的なサポートが有効に機能していることが示される一方で、専門機関を活用したメンタルトレーニングや自主的なイメージトレーニングといった自己動機づけなどは交換がうまく機能していない部分であり、検討の必要性が指摘される。具体的な支援やサポートとしては、指導者が技術を指導するだけではなく、打ち解けた話をしながらコミュニケー

表8 「競技生活満足度」に対する因子の規定力(重回帰分析)

	スポ科・部所属 (n=162)		
	DF	平均平方	F値
	10	2.87	2.34*
	標準化係数	t値	有意確立
F1：自主自立	-0.08	-1.0	n.s.
F2：視野の拡大	0.03	0.43	n.s.
F3：専門的なメンタルサポート	0.06	0.79	n.s.
F4：気晴らし(リラクゼーション)	-0.05	-0.66	n.s.
F5：日常的なケア	0.17	2.17	*
F6：指導者との関わり	0.19	2.38	*
F7：学生生活の諸資源	0.18	2.40	*
F8：学外での活動	0.09	1.14	n.s.
F9：施設・設備	-0.05	-0.69	n.s.
F10：自己動機づけ	0.08	1.04	n.s.

* P<0.05

表9 選手レベル別「競技生活満足度」に対する因子の規定力(重回帰分析)

	正選手 (n=55)			補欠選手 (n=19)			一般選手 (n=70)		
	DF	平均平方	F値	DF	平均平方	F値	DF	平均平方	F値
	10	0.91	0.98(n.s.)	10	1.74	2.53(n.s.)	10	1.72	1.61(n.s.)
	標準化係数	t値	有意確立	標準化係数	t値	有意確立	標準化係数	t値	有意確立
F1：自主自立	-0.10	-0.63	n.s.	-0.28	-0.85	n.s.	-0.04	-0.35	n.s.
F2：視野の拡大	0.05	0.30	n.s.	0.31	1.15	n.s.	-0.05	-0.36	n.s.
F3：気晴らし	-0.06	-0.38	n.s.	0.20	0.95	n.s.	-0.12	-0.94	n.s.
F4：専門的なメンタルサポート	0.18	1.18	n.s.	0.18	0.77	n.s.	-0.10	-0.8	n.s.
F5：日常的なケア	0.10	0.64	n.s.	0	0.00	n.s.	0.25	1.95	n.s.
F6：指導者との関わり	0.10	0.66	n.s.	0.65	1.96	n.s.	0.12	0.95	n.s.
F7：学生生活の諸資源	-0.07	-0.45	n.s.	0.51	2.23	n.s.	0.25	2.03	*
F8：学外での活動	0.09	0.58	n.s.	0.01	0.05	n.s.	0.22	1.78	n.s.
F9：施設・設備	-0.18	-1.20	n.s.	-0.40	-1.15	n.s.	-0.04	-0.35	n.s.
F10：自己動機づけ	0.29	2.04	*	-0.55	-2.29	n.s.	0.08	0.59	n.s.

* P<0.05

ションを図ることや自分の競技種目に有効な技術や体力の向上につながる大学での講義が求められている部分であり、その交換がうまく機能することが競技生活の満足度を高める要因になると考える。

(2) 選手レベルによる支援ニーズ因子の機能

表9は、対象者に応じたより具体的なサポートを検討するために部内での選手レベル別による競技生活満足度と支援ニーズ因子の規定関係の結果を示したものである。その結果、正選手では、「F10：自己動機づけ」がプラスに作用していることから、ライバルの存在や自主的に動機づけをすることが競技生活の満足度を高める要因であることが示された。一方、一般選手においては、「F7：学生生活の諸資源」が競技生活満足度を高める要因となっていることから、技術の向上や体力向上に関する専門的な授業やアルバイトなどの学生としての活動が有効に機能していることが明らかにされた。

しかしながら、他の要因については競技生活を高める傾向が示されてはいるものの、有意性は認められず、交換過程が有効に機能していないことが示された。特に、補欠選手においては、正選手や一般選手と比較して指導者との関わりが競技生活の満足度をより高める要因であることが強調された。

これらの結果から、部内での選手レベルによって求める支援と有効な交換が明らかにされた。

IV. 結 論

本研究は、運動に深くかかわる者のサポート要因を究明するために、マーケティングの最も基本となる交換過程の視点から、競技者の支援ニーズを明らかにすることを目的とした。特に、本研究のテーマが基礎的・探索的段階であることから、まず女子体育大学運動科学科で競技性の高い運動部に所属する学生に着目し、分析と考察を試みた。その結果は、以下のように要約される。

1. 女子体育大での運動や競技に深くかかわる者が求める支援ニーズが明らかにされたとともに、支援ニーズ因子が構造化された。

支援ニーズ項目に対する基礎的反応から、運動部に所属し競技活動をしている学生の視点からみた、求められる支援やサポートのニーズが明かにされた。競技者を取り巻く環境1に位置づく「監督・コーチからの指導」や「技術練習」などのデジタル的な要素への需要が高い傾向を示すことは

競技力向上やより高いパフォーマンスを目指す上で当然の結果と考えられる。また、環境2の要素である「何でも相談できる友人」や「家族の支え」、「友達との娯楽」などのきわめてアナログ的な項目が高い結果を示したことから、競技力に直接関わる中核的な内容だけではなく、周辺的な要素であるサポートの重要性が示された。

また、本研究で設定した支援ニーズの項目は因子分析により10因子が抽出・構造化され、内容の妥当性が認められた。

2. スポーツ活動状況に応じた体育大生サイドの求めるサポート要因が明かにされた。

支援ニーズ項目の因子分析から抽出された10因子において、部内の状況や活動への満足度でスコア比較を行った結果、それぞれの活動状況によって求められる支援やサポートの傾向性が示され、各状況に応じたサポート要因の必要性が示唆された。

3. 支援ニーズ因子の機能が明確に示された。

支援ニーズ因子の機能を競技生活の満足度との交換過程から分析した結果、それぞれのスポーツ活動状況によって有効な機能が明かにされた。すなわち、指導者との関わりや大学での専門的な授業などの全人的なサポートが有効に機能していることが明らかであった。しかし、現状では、環境1に位置づく専門的なメンタルサポートや自主的なメンタルトレーニングなどは有効に機能していない部分であり、今後の検討が必要と考える。

今後は、ますます競技力向上に寄与するマーケティングの導入が重要になろう。尚、その際には、さらに多様なレベルの対象者を分析し、特に本格的なアスリートを対象にした分析やより多くの種目を想定した分析が必要になるものと考えられる。また、競技者から提供者への交換要因の関連についても相互分析が必要となろう。

引用・参考文献

- 1) 浅井慶三郎, 清水 滋編著(1991).「サービス業のマーケティング:改訂版」同文館, 東京.
- 2) 浅見利雄(2000).「国際競技力の向上を目指したスポーツ医・科学研究-「国立スポーツ科学センター」の果たすべき役割-」スポーツと健康32巻: 7-10.
- 3) 有馬 哲, 石村貞夫(1988).「多変量解析のはなし」東京図書株式会社, 東京.
- 4) ボニーL・パークハウス編著 日本スポーツ産業学会監

- 訳 (1995). 「スポーツマネジメント」大修館書店, 東京.
- 5) Bernard J. Mullin, Stephen Hardy, William A. Sutton (1993). Sport Marketing, Human Kinetics Publishers.
- 6) 畑 攻, 山下秋二, 富田幸博, 他編著(2000). 「スポーツ経営学」第5章3. スポーツプロダクトの構造 106-118. 大修館書店, 東京.
- 7) 中西純司, 畑 攻, 山下秋二, 他編著(2000). 「スポーツ経営学」第8章1-3. スポーツマーケティング戦略 170-188. 大修館書店, 東京.
- 8) 川原 貴 (2000). 「スポーツ医・科学研究成果の活用を考える」スポーツと健康32巻: 11-14.
- 9) 近藤隆雄 (1995). 「サービス・マネジメント入門～物づくりから価値づくりへの移行～」生産性出版, 東京.
- 10) 近藤隆雄 (1999). 「サービス・マネジメント～サービス商品の開発と顧客価値の創造～」生産性出版, 東京.
- 11) Kotler. P. 著, 村田昭治監修 (1998). 「マーケティングマネジメント〔第7版〕持続的成長の開発と戦略展開」プレジデント社, 東京.
- 12) Kotler. P. (2000). Marketing management, The millennium edition. New Jersey: Human Kinetics.
- 13) 文部省体育局競技スポーツ課(2000). 「国立スポーツ科学センターにおける個別事業概要」スポーツと健康32巻: 15-17.
- 14) 小野里真弓, 畑 攻(2001). 「テニスレッスンにおけるサービス・マネジメントに関する研究」日本女子体育大学紀要第31巻21-28.
- 15) 酒井 隆(2003). 「図解アンケート調査と統計解析がわかる本」日本能率協会マネジメントセンター, 東京.
- 16) 酒井 隆(2005). 「マーケティングリサーチハンドブック」第16章多変量解析 369-429. 日本能率協会マネジメントセンター, 東京.
- 17) 佐藤順子(2002). 「フィットネスサービスのプロダクト構造と機能」日本女子体育大学大学院平成13年度修士論文.
- 18) スポーツマネジメント研究会編訳 (2000). 「スポーツマーケティング 交換過程の経営」道と書院, 東京.
- 19) 高梨智弘 (1995). 「ビジュアル マネジメントの基本」日本経済新聞, 東京.
- 20) 高島 稔 (2001). 「体育経営管理学講義」(第12版) 第1部2. 体育・スポーツ経営管理の概念と目的 12-21. 大修館書店, 東京.
- 21) 富山県教育委員会 (2006). 「富山県の体育・スポーツ」富山県教育委員会スポーツ課, 富山.
- 22) 宇土正彦・八代 勉・中村 平編著 (2001). 「体育経営管理学講義」大修館書店, 東京.
- 23) 山下久義(1996). 「実践マーケティング管理論」泉文堂, 東京.

(平成18年9月13日受付)
平成18年12月13日受理)

